

昨夜別館から案内した若い者が宿帳を持つて来たので、尋常に記し附けてやると、「ちよつと伺ひますが、ツケノ、ベ業ッて何の御商賣で御座いますか」と被仰る、そんな事を書いた筈は無いがと、取返して見直したが、思はず帳面投げ出して大晒ひになる、職業を記さなければならぬとあるので著述業と書いたを、先生「ツケノ、ベ業」と御讀みなすつたのである、「ツケノ、ベ業ッて云ふのは、紙を展べて糊を附ける商賣さ、田舎にやアないけど、東京にはうちや、くする程あるさ、いゝから、それで判かるから持つてき給へ」「左様ですか」、これで、那須に居る十日間は、我輩とうくツケノ、ベ業者で押通したのである。

▲殺生石を見る

一場の大滑稽が済んでから、ツケノ、ベの筆を執り乍ら半月ばかり居る豫定で、茶代を二圓に受持の女中へ五十錢遣り、なほ昨夜の座敷の受持の女中へ二十錢の奮發をなし、それから、那須の名所の寫眞を刷つた繪端書を六枚、東京其他諸方に向つて出す、

それが済むと、今度は下駄を穿いて裏口から飛び出し、後を流れる湯川の岸に附いて谷を遡り、殺生石と云ふものを見物に赴いた。

人家の断えやうとする所に、柏の木の非常に古くつて甚だ雅致に富んだのが一本ある、これは長く切らしたくないものである、那須で見ると木は此柏だけである。

四五町行くと元湯がある、大學の先生とか何省の技師とか、天幕生活をして湯の分拆試験に掛つて居る、さうして、其手前の路傍にゐるのが元湯の浴場で、路を隔てて湯守の家がある、此邊から上は、湯川の流れの色が變つて、水の中の石は皆黄と碧とを帯んだ白色に染められて居る、但し、元湯と云つても湧出し口が際立つて見えるのでは無く、地の中から樋で引出すのである、又、湯川と云つても熱湯が流れるのではない、木が繁つた谷の奥から出る水に、多少の湯が流れ込むのである。

湯川に附いて元湯から二三町上がると、此所も一度は噴火した跡にちがひ無い焼石及び其粉末の荒涼たる原があり、硫黄の臭ひ鼻を衝いて悪感を催させる、さうして、いつの年かの噴火に殺された骨の枯木が二本立つて居る山の前に、石垣を疊み上げた

上に柵を繞らした碑石があり、それに守田實丹の市氣溢る、俗悪な字で、「飛ぶものは雲ばかりなり石の上」てふ芭蕉の句を彫つてある。折角殺生石に對する詩的感想に酔はうと思つて來たのが、これが爲めにうんざりさせられて仕舞ふ、それから此石碑の後の更に一段高い所に、鏡餅を壊はした缺片のやうな格恰で、上に四五人の人間が立てる程に大きい、醜い灰色の石があり、其面に割れ目のやうな筋の見出だされるが、これにも柵が繞らされて、所謂殺生石なることを表示して居る。

折も好く、我輩をツケノ、業者にした宿の若い者が、一組の客の案内をして來たので、これ幸いと引提へ、「殺生石は那須野に在る筈なのに、こんな山の上で見るのは可笑しいぢやアないか、これは、土地に景氣を附ける爲め、温泉場の間共が、いゝ加減にこゝにあつた石に名を附けたのだらう」とからかへば、野郎眞面目になつて、遙に温泉場より彼方の山下を指し、「喰初庵に在る殺生石はこれより餘程大きいんです、玄翁和尚に珠數で割られた片割の小さいやつが、此所迄飛んで來たんださうです」と、殺生石の辯護に取掛る、「これア愈々面白い、こんな大きな石が、遙かの下から此山の

上迄飛び上がったのか、成程九尾の狐が化けた石だから、それぐらゐの技をしたのかも知れないね」と笑ひ棄て、其儘我輩は引返す。

尤も、昔からの殺生石と云ふやつも、噴火の際に飛び出した岩塊の一つで、最初は砒素か何かの毒が激しく、之に觸れる小動物を斃した爲めに、牽強附會の説が其間に行はれ、無理に怪しい物にされて仕舞つたのであらう、して見ると、こゝに柵を繞らした石を殺生石の片割だと云つても、別に不都合が無いのみならず、此邊に散らばつて居る數百千の岩塊は、どれも殺生石の片割と名附けることが出来るのである。要するに、こゝの殺生石は、人寄せの香具師的、こぢつけ物に過ぎないのである。

▲温泉宿生活の趣味

殺生石を見て歸ると、晝飯の献立を云つて來る。洋食が出來ると云ふから、試めしにビーフステーキを注文する、まづいけれどもちよつと食へる。

午後に又一回入浴、それから谷を隔てた向の山に登つて見る、こゝからは那須嶽の

噴火の有様が見られるさうであるが、今日は雲が掛つて駄目である。さうして居る中に小雨がしよほくとやつて来たので、小さな楓の木の色づいた枝を一本折り、早々に逃げ戻る、これからの時季は、山が始終もやくして、快晴の日が滅多に無いさうである。

夕飯のおかずは卵と茗荷との吸物に豆腐のうま煮、いづれも我輩を閉口させる品である。それに、朝来二度入浴した結果、湯が無病の者には荒過ぎる爲め、少しく不快を覚えて来た、其方も此方も閉口だらけである。

そこで、夜は今一度入浴しやうと思つたのを見合はして、隣室及び其又隣室の人と交通を始める、これだけが此別區劃の上等客である。

隣室は、二十五六の男が一人で、御納戸の羽二重の羽織を着、頭は奇麗に剃り圓めた坊主で、顔も坊主的人相であるから、さう思つて話し掛けると、飛んだ見當ちがひで、日本橋の洋物問屋の地方掛、上州信州から越後路を廻つて歩く中に、よくない物を食つた報ひは靨面、鼻梁を通り過ぎて頭へ發したので、無常を悟つた譯にはあらぬ

詮方無しは今道心、詰まり、毛を生やして置く所々の空地が目立つて見つともないからと白状された、我輩が筆と紙とに親んで居るを見て、「俳諧の道ですか」とは、ツケノ、業より纒に一步を進めた訊ね、これも亦面白いと、「まアそんなものです」。

それから、一軒置いて隣の室は、商人らしい腰の低い夫婦者に五つばかりの女の子、此夫婦頗る附の世話好きの親切者で、我輩の爲めに此温泉場に居る心得を説いて呉れること甚だ詳かであるが、何より有難いのは、宿の献立の外に旨い物を手輕に食へる方法を教へて呉れた事である、それから、女の子は我輩を其身と同格の者にあしらひ、「叔父ちゃん、御友達になつて上げまぢやう」などと、頻りに我輩の室へおもちゃを持ち込み、よき飯事の相手を得たりと喜ぶのである。

これらは温泉場生活の趣味と云ふべきものであらう。

◎九月八日

▲半自炊の趣味を嘗め始む

午前六時起床、入浴。

裏口から出て少し左へ行くと、鳥や、鰻や、土鱈を賣つて居る店がある、それと向合つて、干魚、鹽魚、野菜などを商ふ者もある、一軒置いて隣の座敷の細君が教へて呉れたのはこれである、此二軒から何でも自分の好きな物を買つて来て、煮たり焼いたりして食ふのである、そこで我輩は、晩には烏鍋にしやうと見當を附けて置いて、朝だから今は鹽鮭を一切れ二錢五厘で買つて引返す。

長火鉢には銅壺も附いて居る、火箸を二本渡して、不器用な手附で鮭を焼く、食つて見るといゝ加減にまづいが、それでも宿の味噌汁よりは數等優つて居る、これが我輩の半自炊生活のやりはじめである。

朝は珍らしく快晴であつたから、今日こそ下駄が草履になるまで山を飛び廻らうと意氣込んで居る中に、手の裏をかへすやうに曇つて來、而も其曇はだんく頭を壓すやうに低くなり、果ては二階の欄干の外を濛々たる白い霧に鎖して仕舞つた、煙のやうな細かい雨は障子を吹いて、紙を濡らし玻璃を曇らす、是非なく外出を見合はし

て、東京朝日の水谷君と約束した忍術の話の材料を記し、女中を呼んで郵便に出させる。

十四五の女の子が、團子だの菓子だのを賣りに來る、かうして座敷を廻つて歩くのである、團子を買ふこと五錢。

三十ばかりの女が漬物を賣りに來る、菜漬を買ふこと二錢。

年を取つた女中頭が、通帳を持ち乍ら挨拶に來たので、これに呉れること五十錢。

さうして居る中に晝飯と來た、黄味かけ卵に野菜の旨煮、不相變我輩の口に合はぬ品ばかりである、膳を控へて又もや裏口を走り出で、鰯の目指を買ふこと三錢。

▲温泉神社の木立

午後又一浴を取る。

天氣がどうやら持直して來たので、堪らず下駄を突掛けて飛出した、けれども、まだからりと上がったわけではないから、遠走りを見合はして、前の往來を昇り切つた

突當りの温泉神社へ行つて見る。

華表のほとりに、清い泉を樋で引いて桶に滴らして置く所がある、掬んで見ると、飲料として性のいい方である、盛夏は定めし此所に人が集まることであらう、神社は粗末な結構であるが、華表から一町餘りも奥まり、此間の木立は、温泉場へ添へられた唯一の風致である、此木立が無かつたら、那須の湯本は一日も我輩を引留めることが出来ないだらう、柏の古木を主として、山櫻の年を経たなどが雜り、野菊、女郎花のひよふく、したのを下草にあしらつて居る。

歸りには、路と云ふ程でもない人の足跡を躡んで、木立を横に突抜けると、遙の下を蟻のやうに人が群れ行くのが見える、赤黒い一區域は殺生石を含む焼石の原で、白く光るは湯川の流れである、路の轉ずるに任かせて何所迄も行くと、湯川の中に露はれて居る石を渡つて、殺生石の直ぐ下へ出た、何だ詰まらない、一度見れば澤山な殺生石を、今日も態々見に来たのではない。

▲手製の烏鍋と隣の娘

宿へ歸つて、小説怒濤の續稿に筆を執る。

夕飯には、豫定に隨ひ裏通りの商店で、十五錢の鳥肉と二錢の葱をととのへ、鍋や醤油や味淋を宿に命じて手製の烏鍋を作る。

宿で出来るのは芋莖の胡麻酸と云ふ極めて我輩と調子の合はないもの、それでも義理に一皿取つて、膳の景氣に附ける、外に福神漬を一鉢取る。

鳥の肉は案外にまづい、一體海岸に近い所や平原の鶏はまづいもんで、山の鶏は旨いとまづいて居るのに、なせ此所のはこんなであらうと怪んだが、聞いて見ると、那須地方では鶏を飼はない習慣があり、食用のは、すつと遠い所から殺した鶏を持つて來て賣るのださうである、其いはれば、昔那須の領主（與一宗高の裔）が攻め滅ぼされる時、城が固くつて却々落ちなかつたのを、敵將謀を連らして、數百の鶏を集め、其脚に燃料を結び下げ、一齊に火を附けて城の上へ追ひ揚げた、鶏は驚き慌て、翼の力の限りに飛び揚がり、城の屋根へ止まる、屋根へ火が附く、燃え上がる、仕様が無いから大將以下は切腹、那須の城は苦も無く落去となつた、そこで、此恨み長く那須の

住民の胸に残り、相戒めて鶏を飼はない習慣を作つたとの事。

けれども、こんな非詩的な習慣は宜しく打破すべしである。田舎へ来て朝の鶏の聲を聞かない程力の抜けた氣持はない。

まづい鶏肉を突ツつきつゝ、緩々飯を食つて居ると、「叔父ちゃん御飯食へてるの」と入つて来たのは、我輩の小さき友、一軒置いて隣の座敷の娘である。「何食べてるの、牛ト、？」と訊ねられて、「うゝえ、これはトット」と答へる。「わたいにも頂戴な」「上げませう」と、一切れ箸に挟んで吹き冷まし、可愛い口を明かして押込んでやる。すると、變な顔をして噛んで居たが、いゝ加減になつてから吐き出して返してよこす。「こんな皮いや、肉を頂戴」「みんな皮ばかりなの」「ぢやアわたい歸るわ、」鶏の肉が硬いので、我が小さき友はこれを皮かと思つたのである。

◎九月九日

▲面白き買物

矢張り六時に起きた。平生不規律の人間が、温泉場へ来てから定まつて六時に起きるやうになつたのは、自分乍ら妙である。

此朝は味噌汁を排斥して、烏と葱との吸物を自分で製して食ふ。

さうして居ると、頻りに裏口の外から「御客さん、二階の御客さん、裏二階の御客さん」と呼ぶ所の、卑びた女の聲がある。「何だえ」と障子を明けて顔を出せば、「これ買はねけえ」と、四十餘りの古嬢が變な物を高く捧げて見せる。「何だえそれは」「鰻の焼いたのがす」、成程、短い串に長い奴を螺旋状によぢらして貫いてある。それを五六本纏めて片手に持つて居るのであるから、何だか得體の知れない物に見えるのである。

面白いと思つて降りて行つて見る。二尺ばかりの鰻を割いて素焼にしたので、蒲焼にしたら嘘ぞ旨からうに、惜しい事をしたものである。價を問へば一串六錢と云ふ。土地の者同士よりは餘程高く買り附けるのであらうが、それでも非常に安い。二串買つて十二錢拂ひ、早速其一串を焼直して、味噌醬油に浸して食ふ。所が、これも薩張

り旨くなくつておうやあや。

▲紅葉瀧と谷を隔つる絶壁

晝飯には鱸の鹽焼を取つたが、これは割に旨く食はれた。

昨日より少し暖かく、曇つては居るが昨日より空が高く、後に晴れさうに思はれるので、高尾股の紅葉の瀧を見るべく、例の下駄穿きで立出でた。茫々たる高原の上を段々登りに行くので、振返つて那須野を見降す眺望が一寸悪くない、湯本から高尾股の温泉場迄十六町と云ふが、其倍以上もあるやうに思はれた。

此温泉場はたつた一軒の宿屋があるばかりで、平屋造りの規模小なるもの、周囲の風致も、これぞと云つて目を止むべき點は無い、前に池があつて、よく肥えた鯉が見える、これが客に供する最上の馳走になるのであらう。

瀧へ行くには此家の庭前を通るのであるが、人ツ子一人出て来るでもなければ、「御出でなさい」とも「御掛けなさい」とも云はない、又泊り客も皆無の様子である、庭

前が即ち路で此外に路が無いから、我輩無法者のやうに押通る、但し、或は此家が勝手に公路を自分の庭前に取込んだので、我輩よりも却つて此家の方が無法なのかも知れぬ。

それは兎に角、路は林の中に入つて、足許から山鳩の起つに驚かされなどして、家のある所から更に五六町行くと、所謂紅葉の瀧の前で路が窮まつた。

成程、ちよつと氣の利いた瀧である、見渡した所五六丈ぐらゐるもので、小さい乍らに水量も可なりにあり、岩を傳ふ白糸の趣も、宙を降る雪崩の致もある、けれども、要するに、小景小観である、たゞ、瀧の左右と上部とに楓の樹が少なからずあつて、これが紅葉する時に美觀を呈したから、瀧にも紅葉と云ふ名が附いたのであらうが、何物の悪魔ぞ、残らず是等の樹を切り拂つて、今は切株と藁とを餘して居るばかりである、なせかう亂暴に樹を切つて仕舞つたのであらうと、人に問はまく周圍を見廻はすと、彼方にも此方にも、炭竈が一つならず見えて、青い烟が細く立つて居る、「おおい」と呼んで見たが、山彦がからかひ面に「おおい」と答へるばかりである、外に

も切株が澤山見える、此邊一體に鬱蒼たる森林であつたのを、畜生、皆切つて炭にして仕舞つたのであらう。

其代り、此に失ふ所あれば彼に得る所ありで、此方に樹が無い爲めに、谷を隔て、向ふの山の大観が双眸の中に收め得られるから、世の中の事は漫りに失望すべきでない、我輩が今立つて居る所は、山の胸に刻み着けられた一條の細徑で、これから下の方を瞰れば、巖を穿ち石を轉ばして駛る溪流迄、少なくとも五六百尺はあらう、けれども、何も之に感心するのではない、感心するのは、谷を隔て、我に對する山の勢である、其姿である、其趣である、其色である、之に比べると、紅葉の瀧などは屁の屁である。

高さは如何程であらう、一千尺であらうか、二千尺であらうか、頂上から溪流迄の垂直線を確實に眼で度るべく、我輩は力が乏しい、けれども、此偉觀は一千尺より低い所にあり得べからざるものと信ずることが出来る、殆んど削り成された絶壁の、略ぼ長方形の物體を横に置いたやうな輪廓を以つて、溪流に隨ひ屏風形に立つて居るの

が、全面一點の隙間も無く、緊しく鑿つたやうに、亦大なる鱗を疊んだやうに、緑なる樹に蔽はれて居るのである、それも松杉等の黒みを含んだ常盤木は極めて少なく、寧ろ殆んど無く、見渡す限り葉の落つべき樹ばかりである、語を換へて云へば葉の色づくべき樹ばかりである、而も、山中秋早く、部分々は疾くに色づき初めて居るのである、樹の上に樹が重なつて、何十段か何百段か數へ盡くされない、これが十分に色づき切つた時の景色はどんなであらう。

我輩は、殆んど垂直に近い此絶壁に、どうして斯く樹木が生え揃つたものであらうと、不思議な程案外に思つた、けれども、事實が此通りであるから、唯だ、山の地肌の土と石との重なり具合が餘種都合好く出来て居るのであらうと思ふより外はない、そんなら、此方の一面は樹らしい樹が残らず切り倒されて仕舞つたのに、向側ばかりは何故一本も缺けて居ないかと云ふに、感謝す、それは向側が絶壁で、樹を切るに困難だからである、大仕掛の設備をしなければ切出されぬからである、他にも理由があるであらうが、此大理由がすべての小理由の根據になつて居るのである、此偉大なる

絶壁は、己れ自身に風景を成就すると共に、己れ自身に風景を保護して居るのである。

之を思へば、自然界には到底人力を以て傷害し得べからざる強大なる部分があるので、人力の下に征服されるは、自然界の尻尾の先ぐらゐるものに過ぎぬのである、紅葉の瀧などは、縦合滅茶々に壊されたつて、尻尾の先の毛が一本抜けた程でもない、大に氣が強くなる。

結局、紅葉の瀧の失望から此上無い大満足を生み出して、快然として歸路に就いた。

▲我輩の好物

晩には、我輩の好物なる豆腐を、一串残つた鰻と一緒に煮て食ふ、これは那須温泉場に來てから一番口に適した御馳走である。

◎九月十日

▲觀月の宴

毎朝六時にさまつて起きるものも氣が利かすと、今朝は奮發して五時半に起き、風呂に飛び込む、入つて居る者は宿の隠居一人で、今朝程湯加減のいい事はなかつた。

今日は陰曆八月十五日、晩には、別館の表三階に有志者の觀月宴を催すからと、其廻文が來たので、會費七十五錢出して之に加入した。

相變らず疊つて、湯醒が早く來る日である。

朝飯は宿の味噌汁に自分が買った鹽鮭、晝飯は「のつべい」。

夕方から別館に行つて見ると、表三階の座敷々々を凹字形に打抜いて、男女入雜りに總數六十餘人の來會者、これで、本店別館併せて現在の客の殆んど半數は集まつたのである、料理はオムレツをどうかしたやうな洋食擬ひの物、牛と芋と煮たの、鯉こく此三品だけであるが、蓋し那須温泉場で出來得る限りの上等の材料を使つたもので、これに酒は飲み放題、お負けに餘興澤山とは、七十五錢の會費蓋し廉に過ぐと謂つべ

しである。

別に發起者の開會の挨拶と云ふやうなもの無く、のべつ幕無しの餘興で、温泉場廻りの落語家の御喋りに踊、義太夫語り兼藝妓の糸と喉、いきな叔母さんとハイカラな姉さんとの三味線バイオリンの合奏、但し此合奏は藝人でなくつて客である、那須の温泉にも種々の動物が来て居ると感心する、其中亂軍となつて、喇叭節、法界節、劍舞、滅茶々々踊等、矢玉の飛ぶこと雨霞のやうである、けれども、曇りは夜に入つて益々深く、肝腎の明月はとうとう姿を見せない、尤も、飲む者騒ぐ者共には、月なんかどうでもいゝのであらう、餘興の福引となつて、我輩に當つた物は素敵な大南瓜、之を抱えていゝ、加減の頃に退座する。

歸つて、受持の女中に南瓜を呉れてやつたら、「朴訥は山間の素質」の本文通り、見得も無く大喜びである。

▲月あるに優れる夜色

酒が廻つて来てそゝろ面白いので、一人で又往來へ飛び出す。

恰も好し、夜霧は那須の湯の町を籠めて居る、いつもの夜とはちがつて、霧の底にも月あるらしく、何となく明りを含むやうに思はれるのに、どの家も二階三階盡く明け放して、絃歌の聲薄くが如く、燈燭の光晝を欺くのが、さながら唇の口から吐き出された龍宮城かと怪まれ、光は霧にぼかされて、百千條の黄なる虹を入亂れさして居るのである、見やうに依つては、浩蕩として漕ぎなき大海に浮ぶ市の水煙に包まれて居るものゝやうにも思はれ、数千尺の水の底の別世界のやうにも思はれる、夜霧の中に湯の蒸氣の雜るのは、湛えた水の中に白波の打ち込むやうである、さうかと思へば、忽然として此所は地上を遙に離れた空中の樓閣ではあるまいかと思はれるやうな、非常に高く且つ危い感じが起る。

朗吟徘徊する所の我輩は、人間以上の者のやうである、實に、月無き中秋の那須の山の夜色は、却つて月あるに優つて居るのである、例の手製のねたが二つ出来た、「下野の那須の湯の町 霧して黄なる虹吐く高樓の灯」我歌へば那須の火の山ゆるぎけ

り煙は汝が得言はぬ思ひ」。

◎九月十一日

▲元湯に赴く

午前六時起床、入浴。

此日は冷氣一段加はり、終日曇天で時々小雨を降らせる。

味噌汁と生卵とで朝飯。

今日は、一軒置いて隣の夫婦及び隣の若者に誘はれて、元湯へ行つて見る、ほんとうに病を癒さうとする者は元湯へ入らなければならぬ、温泉宿へ引いて来る迄には、途中で湯の効力が半分失せると云ふことである、無病健全の我輩には、温泉宿の湯でさへ寧ろ強過ぎを覚えるのに、更に一段強い元湯へ入つては堪つたもんでない、けれども、これも経験の爲めと思つて、誘ふに任せ、行く氣になつたのである。

手拭と柄杓とを携へ、襦袢の儘で行くのであるが、行つて見ると、湯守の家には二十人餘りの男女が集まつて居る、着物を脱いで、犢鼻褌一つで往來を横切り、向側の風呂場へ飛び込む、非常に熱く、どろ／＼したやうに濃厚な湯で、人々一號令の下に入り、一イニウ三イ四ウ五六ウ七八ア九十と幾度も繰返し數へる者があり、一定の數に及ぶと、又もや其者の一號令の下に出るのである、さうでなく勝手に出たり入つたりしては、熱くつて我慢が出来ないのである、こゝも矢張り男湯と女湯とが別れてあり、其筋の注意が入釜しいのであるが、女湯はいつも微温にして置くから、男でも熱いのを嫌ふ者は自然女湯に逃げ、女でも熱くなければ病に利かぬと思ふ者は進んで男湯を襲ふ、見得も何も無く、たゞ一生懸命に病ひを癒さうとするのである、其代り、男だつて女だつて、此所へ来るのに、満足な身體の者奇麗な身體の者は一人も無い、若い美人だと思つて見ても、着物を脱がれると身震ひが出る。

早々に逃げて歸らうと思つたが、十二時になつたので、湯守の家で人々と同じく、此所ではこれより外の物が出来ないと言ふ五目鮓を取つて食ひ乍ら、暫く廻り將基を

なす、此又五目鮓のまづい事と云つたら、天下にこれ以上の物があるまい、但し一人前たつた九錢であるから、贅澤を云ふのは無理かも知れない、其代り、一日居ても、此五目鮓を食つただけで、外に餡ころ餅か菓物を取つてもいゝし取らなくつてもいゝし別に茶代をやらなくつてもいゝのであるから、宿での晝飯をぬきにした上に元費を省いて、算盤勘定上、長逗留の間には餘程の差違を生ずると云ふのが、一軒置いて隣の夫婦の主張で、我輩をも熱心に其宗旨に引入れやうとするのである、親切は忝けないが、我輩たつた一度で懲りくしたから、無理に振切つて一時頃逃げ歸る。

▲深夜唯一人の入浴

午後は怒濤の筆を執つて日を暮らし、鱸の鹽焼を取つて夕飯を済まし、八時頃枕に就いた。

ふと目を覺まして枕許の時計を見ると、丁度午前の一時である、こんな時に湯に入つたらどうであらうと、早速起きて行く、ひっそりとして動く物も鳴る物も無く、戸外

の風さへ絶えて、那須の温泉場は其儘に化石したかと思はれるばかりである、風呂場の中も冷え渡つて、二つ並んだ湯槽のどれも三分一しか残つて居ぬ湯が、手を入れて見ると夏の溜り水のやうである、山高く夜の氣の締まるが儘に、湯氣の爲めに濡らされた後の天井、羽目、玻璃窓は、皆無數の玉を吐いて居る、歡樂極まつて哀情多しと云ふやうな趣の、一旦燃やした熱情の醒め切つたと云ふやうな氣味の、此妙な境に、唯一人裸體で居ると、何と無く淋しく哀れに、骨の底から悲感の搖るぎ出るを覺える。

けれども、桶の栓を抜いて、濼々たる蒸氣と共に熱湯の噴き出すを見るに至つて、此一區域内の空氣に、再び歡樂が蘇り熱情が湧くのである、十分新しい湯に暖まつて出る途端、隣の女湯の戸が、がらりと開いてびしやりと締まつた、ざアと湯の噴き出す音、着物を脱ぐ場所の衣桁を見ると、フランクネルの單衣に派手な矢舁の銘仙の綿入羽織が重なつた上に、朱鷺色の扱帯が掛つて居る、何者であらう。

寒氣立つて來たので、早々歸つて蒲團の中へもぐり込む。

◎九月十二日

▲身體不安

午前九時起床、入浴。

此日は休み無しに雨降る、其代り少し暖かみを覚える。

朝飯は、食慾振はないので、義理のやうに一椀で済ます、副食物は例に依つて例の如き味噌汁だけである。

夜中に起きて入浴したのが悪かつたかも知れない、寒くないのに、頭から背に掛けて厭やにだるくて重く、それに、腸が緩んで下痢の氣味があるが、午前一時にたつた一人で湯に入つた若い女が氣に掛り、何者であらうと、母屋から離座敷、二階三階残り無く、一廻り探險を試みる、けれども、小松屋本店も早や秋に淋れて、昨日より今日は著しく客が減じ、彼方此方に離れ島の生活をなして居る者纔に七組か八組で、數日

來見覺えの顔ばかりであるが、午前一時の女らしい者はどの座敷にも見えない、之を不思議にして仕舞ふと話が面白くなるが、多分今朝出立したのであらう。

▲温泉宿生活以來の勉強

晝飯は炒鳥、夕飯は鮪の刺身、外に餠ころ餅も買つて食ふ、桃も買つて食ふ、此所一番銀月流を發揮して、身體の不安に打勝つべく試み、夜の十二時迄筆の執り詰めて遂に怒濤二百二十回を完結した。

此日は、温泉宿生活を始めて以來のからだの具合の悪い日で、且つ、温泉宿生活を始めて以來の勉強した日である、我輩の尤も自分と闘つた日である。

◎九月十三日

▲始めて眞の美味を食ふ

午前六時起床、入浴。

朝飯は味噌汁に生卵、下痢や、輕快、食慾半ば振つて來た。

怒濤の原稿を書留郵便で時事新報社へ送る。

午前、東京朝日の水谷君、新公論の關君から、各手紙、水谷君は、珍研究の事に就いての用向に兼ね、我輩の寫眞を網版にしたのを刷つてよこされた、關君は、其新夫人住江君と共に、温泉宿生活の無聊を慰むべく、種々面白い事を書いてよこされた。

此日は矢張り空の低い曇りである、晴れたら噴火口探險に赴かうと、隣座敷の坊主頭君と約束して置いたのであるが、これぢやア逆も見込がない、「がっかりしましたねえ」「癪に障りますねえ」、これは今朝始めて顔を合はした時の双方の挨拶。

其代り、晝飯には思ひ掛なき御馳走があつた、鮎の鹽焼の見事にびんと反つたやつ、長さ尺に餘り、肉は堅にはち切れ、骨はとろくと脂の固まりに包まれて居る、一箸しては「旨い」、二箸しては「奇妙」、三箸しては「愉快」と叫ぶ、是一つで、今迄那須の食物の悪口を云つたのを取消したくなる。

▲義太夫を聴く

晚には別館に義太夫があるから、聴きに來いと、宿からの案内を受けた。

鮎の照焼で夕飯を濟まして、どんな義太夫だらうと、聴かない中から腹でけなし乍ら行つて見る、廣い下座敷を二間打抜いて、寄席風に座蒲團や煙草盆を配置し、高座も後幕も皆一通り揃つて居る、聴き手は本店別館の無聊に苦む客に宿の者、菓子は附かないが茶だけは一同に出る、此催しは宿の馳走で、客から錢を取るのではない。

最初に高座へ上がったのは、宿の二番番頭のカイゼル鬚に前掛と云ふ不調和の打份の奴、「飯をうんと食つたら息が苦しい」と呟きながら、小牧山城中の場を、「散る花の別れを」から五郎助が出の前迄語る、其實語るのではなくつて、不器用に唄ふのである、次には、竹本越乃太夫と云ふ黒人が現はれ、正式に肩衣を着けて、寺小屋を首實験が濟む迄、それから酒屋を一段語る、三味線も矢張商賣人と見える、越の字が附いて居るだけに攝津大椽一流の語り口で、主として佐和利を聴かせる方、随つて寺小屋より

は酒屋の方が聴かれた、まア、寄席へ出したら切前ぐらゐの所であらう、兎に角、思つたよりは好かつた。

・昨夜が遅かつたので、途中から睡氣がさしたのを、我慢してとうとう聴き了つた。

◎九月十四日

▲噴火口探險

午前五時起床、入浴。

今日はどうあつても噴火口を探險せずには置かないと、大に勇氣を鼓舞し、いつもより早く飛び起きたのであるが、意地悪く雨よりも深い濃霧である、「畜生」。

朝飯は例の通り。

晝飯は鮎の煮びたし。

朝飯も晝飯も不快で食つたが、不思議にも午後からからりと空が晴れ上がった、秋

に入つてから、此地にして珍らしい天氣である、「畜生、馬鹿天氣」と我輩に罵り続けられて、天叟一番憤發する氣になつたのであらう。

隣座敷の坊主頭君は、濃霧に辟易して元湯行も見合はして居たのである、「どうです、天氣が好くなつたから、これから噴火口へ行つて見ませんか」と云へば、「これからですか、噴火口までは二里あるさうですから、登り路で時間が普通の倍かゝるものとすれば、行き着く頃には、大概日が暮れませう、あんまり冒険ぢやアありませんか、明日にしちやアどうです」と凹む、「二里ばかりの路なら、驅けてだつて登れませう、明るい内に噴火口を見たら、歸りは日が暮れたつて構はないぢやアありませんか」「わたしにやア、逆もそんな真似は出来ません、それに案内者を連れてかなさやア、十分に見られないさうぢやアありませんか」「案内者もへつたくれも要るもんですか、こんな天氣は滅多に得られませんから、ぢやア、僕一人で一走り行つて來ます」。

坊主頭君、なほも切に我輩の無謀を戒める、受持の五尺二寸女史も、「明日になせぬまじ、明日案内者を連れて御出でなせえまし」と苦止するのである、けれども、「其明

日の天氣が悪かつたらどうする」と云ひ棄て、蝙蝠傘を提げ、下駄を突掛けて、どんく裏門をかけたのは、午後の一時半頃である。

▲高原の放し駒

後の谷川の橋を渡つて、向ふの山へ駆け登る、此山の上から先は始めて踏み路であるが、地圖を懐にして居るから、ちつとも心細くない。

楓の葉、漆の葉、蔦の葉、山葡萄の葉、其他の葉が、數日來て見ぬ中に餘程色濃くなつた、路は幾條もあるが、別れ目には石の標が立つて居るので迷ふことが無い、噴火口道と云つてはないが、辨天大丸三斗小屋道とある所の其三斗小屋を目指すのである、否、我輩の行先は三斗小屋ではないが、三斗小屋へ行くには、那須嶽の最高峰たる茶臼嶽を越して噴火口の傍を通るから、此路を取れば自然に噴火口へ行くのである。

低い雑木の繁り合ふ間を押分け、大雨や雪解の時には川を流すべき赤土の路を登る。

こと十町餘りにして、怪むべし、路は粗末ながらも頑丈な木戸に塞がれて居る。

扱ては、正當に來た積りであるけれども、何所かの別れ目で路を違へ、山に住む者の宅地へ迷ひ込んだのだなと、早速引返さうとしたが、兎に角訊ねて見てからにしよう、**「此所は人の通れない所ですか」**と大音に呼ぶ、すると、**「通れます、今開けて上げます」**と慌たしい女の聲がして、聲に相當した嫌アが現はれ出でた、聽て戸が内の方へ一二尺開くと我輩は潜り込んだ。

我輩の風體を見て、嫌アの外に其亭主らしい男も出て來た、**「御待たせ申して済みませぬえ、ちと御掛けなせえまし」**と叮嚀な挨拶、見れば傍に物置小屋同然の建物があつて、それに二人が住んで居る様子、秋草があたりに咲き亂れて居る、此所は湯本より餘程高く、彼は海拔四千尺もあらう、**「なせ、かうして路を塞いで置くんです」**これから上は牧場で御座えますから、馬が下へ逃げ出さねえやうに、かうして置くん御座えます**「あゝ成程」**と我輩は合點が行つた。

見渡せば、茫々たる高原の上に、絶大の砲臺を置いたやうな形の峯が聳え、濛々と

灰色の煙を噴き出して、青空を曇らせやうと力めて居る、其右に赤黒く醜惡な色を以て、劍を植えたやうに尖つて居る峰は、砲臺の形したそれよりは少し低い、地圖に依ると、左は那須の主峰茶臼嶽で、右は朝日嶽と云ふのである、高原の上は白く尾花を波寄らして、女郎花を主となせる黄と、龍膽を主となせる紫とを之に點じ、其最も高き部分には、一旦天を衝いて更に風に吹き靡けられる茶臼嶽の噴煙を柳引かして居る、見よ、實に雄烈豪大の觀、此大局面の上に動く者皆馬である。

鹿毛、栗毛、蘆毛、月毛、尾花と共に皆秋の色である。

之に對すると、我輩勃々として覇氣の動くに堪へなくなる、眉昂り腕鳴るを覺える此四千尺の高原と此數百頭の荒駒とあつて、那須は詩となり又畫となるのである、四五頭乃至十頭餘り集まつて、堅壘を築くやうに犇々と小高い所に固まり立つたかと思へば、忽ち驚濤の崩るゝが如く斜面を争ひ下る、仰いで高く嘶く者、俯して低く、食む者、鬣からは雲を吐き、尾からは風を生む、登り行く儘に、逢ふ者皆馬である、或者は我を見て笑はんとし、或者は我を見て揖せんとし、或者は我を見て、つんと横向に

なり、或者は我を見てへん氣取つてやわがると反身になる、「四千尺硫黄の煙靡く野を栗毛蘆毛の駒の國かな」「白河の關を渡りて來る秋に鬣振ふ那須の荒駒」。

▲硫黄を製する人

牧場の高原を通り過ぎると、路が少し降りになつて、清い溪水が淙々と流れ、之を挾んで林が茂つて居る、馬のやうに水に口を着けて飲む、此所にも亦木戸があるが、通る者の開閉するに任せて、番人の小屋は無い、噴火口近い所迄馬の逃げ登る憂ひは少ないからであらう。

大丸の湯へ路が別れる所に墓表が一つあつて、佳岳哲讚信士靈位と彫つてある、こんな所に骨を埋めるとは大に振つて居る、それから又少し登ると、一丈餘りの立派な石塔の崩れ掛つて居るのがある。箱根の山にある多田の満仲の墓と云ふのと形が似て、更に一層雄大である、之も誰かの墓とすれば、佳岳哲讚信士以上の者のであらうが、彫つてゐるのは梵字ばかりだから判らなう。

再び登ると、路は次第に急になつて、何時の頃かの噴火の名残の、白骨を立てたやうな枯木が、盛々と限り無く立つて、其間から、赤黒い茶白嶽と朝日嶽と濛々たる噴煙とを望む景色は、此世の外のやうに物凄く恐ろしい、何かは知らず、鐵を切るやうな鋭い聲で啼いて、白骨の木の尖端から尖端へと飛び渡る鳥がある、尾花は瘦せてひよろくし、龍膽は毒々しく赤味の勝つた色で、植物の色と形とが餘程變つて来た、珍らしくも路の傍に木莓があつたから、二つ三つ採つて食つたが、あとに苦みが残つて氣持が悪いから、矢鱈に唾を吐き出した。火の山に渴きて路の莓食み舌に残れる苦き津を吐く。

白骨を立てたやうな枯木の間、砂漠の中のオーシヌと云ふやうな緑の林があつて、路は其中を貫くべく進むのである、すると、炭籠のやうなものを三つ並べて上に茅葺の屋根を掛け渡した所がある、傍を見ると之に附屬した人の住むやうな掘立て小屋もある、さうして、此所へ來ると硫黄の臭ひが鼻に浸込むやうである。

林から浸み出す水を細竹の樋で引いて、桶に滴らしてあり、柄杓も中に浮いて居る

から、莓を食つて氣持が悪くなつた胸を洗ふべく、先づ柄杓に口を附けてがぶりとやつた。「あゝいゝ氣持だ」と胸をたゞけば、小屋の中から「あへん」と咳拂ひ、あゝ断らずに呑んだのが悪かつた。

「御免なさい、断らずに水を頂きました」「澤山御喫んなさい」「有難う、もう澤山です」「ぢやア休んで御出でなさい」「有難う」と遠慮せずに入り、上り框も無い低い床に腰を掛ける。

中は荒蕪を敷き渡して團爐裡だけの空間を残し、枯木の白骨を推いたのを焚いて、寒さうに煖つて居る者は、三十許りの男である、むくむくした筒袖の綿入を着て居る、茶を入れて出したり、風が來たら飛びさうな麵包菓子を出したりする所を以て見れば、これで傍ら腰掛茶屋を商賣にして居るのであらう、「炭籠見たいなものは何です」と單刀直入に問へば、「硫黄を製するんです」と氣取つて答へ、よく聞くと、噴火口から採掘して來る硫黄を、蒸し直して精製するのださうである。

「御客さん、何所へ御出でます」と、今度は向ふから訊ねる、「噴火口を見に行くんで

す。これから噴火口へは、もう直さでせう」と、答へて更に問ひ掛ければ、「また半里はんりあります。御連れは後おきから御出でますか」と重ねて折り返す。「連れなんかありません、一人です」「へえ、御一人で噴火口へ」「一人ぢやア行けないんですか」「行けないことはありませんが、案内を知らない、行つたつて判りませんよ」「さうですか、けれども、こゝ迄来て引返す譯にも行かないから、判らない迄も、兎に角一人で行つて見ませう」。是等の問答を疊んだ末に、男は暫く思案の體であつたが、「わたし御案内しませうか」と來る。「それア實に有難い、どうぞ願ひます」と喜ぶと、「二十錢ではどうでせう」。

早速案内料を二十錢と定めて前拂ひにし、外に茶代を十錢出すと、山男大恐悦である。何か身仕度でもするのかと思へば、其儘の、どろりとしたなりで、跣足で土間へ降り、のどろりと穴を出る熊の如く日光の下に立現れる、どろりとしたなりと云つても、衣は肩に至り袖は腕に至る方であるから、別に裾を端折る必要がないのであらう。「さア、行きませう」と云つたかと思へば、我輩に頓着無く、一人ですん／＼山に登

り始める。我輩狼狽して、後から驅け登つたが、なかく追附かれるもんでない、其癖野郎は緩々と煙管で煙草を吹かし乍ら登り、此方は一生懸命煙草の煙のやうな息を吐きつゝ登るのである。空氣はやゝ薄く、路は今迄より倍も急になつたのに、更に其路より一段急な捷徑ちかみちを取られるのだから堪まらない。

けれども、待つて呉れと弱音を吹きたくはない、身體を鍛へるはこんな時と、齒を切ばりつゝ驅け登つて、やう／＼噴火口の傍迄漕ぎ着けた。

疊なら十枚も或は其餘も敷かれさうな部分が、底の知れぬ穴になつて、盛に硫黄臭い蒸氣を吹き出して居る、男の説明に依ると、之は古吹ふるふきと云つて、昔からある穴ださうである、どうかして、風が強くと穴の中へ吹込む時には、噴き出す蒸氣の量が少なくなつて、途中迄入つて見られると云ふ、三斗小屋へ行く路は此穴の直ぐ傍を通つて居る、要するに、思つた程凄くも恐ろしくも面白くも可笑しくもならぬ。

男は我輩の左迄感服しない顔を見て、「もつと登つて見ませうか」と云ふ。勿論の事、こんな所を見ただけで、引返すなら、案内者もへつたくれも要はない、「何所迄で

も、人間の行き得る限り迄案内して下ろす。」

そんなら、「わたしに附いて御出でなさい、あぶないから、足許に御氣を御附けなすつて」と、其濛々たる蒸氣の中をば、赤黒い巖角を攀ぢつゝ登り始める、我輩それでも下駄を脱がずに、殆んど屏風立ちの所を、たゞ金米糖のやうに出た巖角を便りに登る、頭の上に、ぶわッ、と流鐘車を十も二十も集めて一度に湯を吐かせるやうな音のするのは、新吹と云つて何年以前とかに吹き始めたのださうである、此奴は勢ひ甚だ猛烈であるが、唯だ重なつた岩の隙間から吹出すので、穴と云ふ程の穴は見えない、少し登ると危い所は通り過ぎ、石吹と云つて、石を投げ込めば吹き戻す穴や、湯吹と云つて、滾る湯玉を吹出して居る穴などを見つゝ行けば、何時しか、濛々と轟々との小地獄を脱却して、肌を切るやうに風の寒い頂上に立つのである。

硫黄は、新吹だの石吹だの、蒸氣と共に吹出されて縁に溜つたそれを採るのである。丁度、硫黄臭い蒸氣の生温い間を出て、吻と息をした時、傍に米俵を立てた程の岩があつて、上が凹なのに、何時の雨の名残か數合の水を溜めて居る、餘りに清らかな

ので、試みに手を觸れて見ると、指先が裂けさうに冷たい、山は火の山、而も、火を噴くと云つてもいゝ、蒸氣の吐出口の上に立つて居る石ではないか、何等の妙味あるコントラストぞと、際どい所で又もや一首、「火の山の火を噴く口の上に立つ凹める岩に氷らんとす水」。

要するに、那須の噴火口を探険することは、世に詰まらない事の一つである、此山昔大に火を噴いた時は、嘸ど壯觀であつたらう、茶臼嶽も朝日嶽も七花八裂して、千萬億塊の殺生石を、那須の篠原へ霞と降らす時の壯觀は、男兒をして起舞せしむべきものであつたらう、又、新吹と云ふ名もあるくらゐだから、此後とても、更に大發展をなして我輩を欣喜雀躍せしむる秋が無いとも限らない、けれども、それは過去及び未來の事で、それを以て現在の詰まらなさを埋合はせることは出来ないのである、要するに、現在の那須の噴火は山の尻に過ぎぬのである。

但し、山の頂の前面に立つて、那須野を見降すのは、先づ雄大と云つてもいゝ眺望である、我より二千尺も下を行く雲から雨が垂れて、白河の方を打煙らして居るのなど、

此所迄登つただけの勞力を空うせぬ儲け物である、「火の山の煙押分け我立ちて那須野に垂る、雨を見しかな」。

茶臼嶽に似た形の岩片を一つ拾つて歸る。

▲宿の騒動

歸りは二里の路を一飛びの積もりであつたが、木の根があつたり、巖角があつたりして、なか／＼さうは行かない、息切れがしないだけで、足の運びの困難なことは、登りに優るとも劣らない。

やう／＼巖角の無い高原迄降りたと思へば、今度は雨が降つて来て日が暮れる、赤土の路に下駄が滑べる、驅けると轉ぶ。

こんな始末で、歸つて宿へ着いたのは、夜の七時過ぎである。宿では大騒動、これから三四人の若者を捜がしに出さうと評議して居る最中であつた。

鯉の雉子焼で飯を食ひ、一浴して寢に就く。

◎九月十五日

▲歸京の準備

午前六時起床、入浴。

半晴半曇。

午前、尾張町の姉からの書留郵便が届く、時事新報から金を受取つて爲替にして呉れたのである。

湯は身體に合はず、そろ／＼「たゞれ」と云つて湯中^{ゆあた}りが出さうである、心に掛けた噴火口も探險して、其詰らなさ加減をも知つたから、もう那須に用がない、金が來ると急に歸りたくなる。

そこで、宿に命じて通帳を締めさせる、總計九圓十二錢、それで今日の晝と晩と明日の朝との勘定を概算して、奇麗に十圓出す、茶代や女中の心附は、前に出してゐる

から世話が無い。

晝は鮎の鹽焼、今日のも尺餘の見事な奴で、素敵と呼ぶの外は無い。

午後は、土産物をとりのふべく、外へ出て、挽物細工の菓子器を五つ六つ買った。

夕飯は初草と豆腐との御露。

夜、隣室及び一軒置いて隣の人々と別れを惜む。嬢ツちやん曰く、「叔父ちやん明日歸るの、何時又いらつちやるの」。此小さい女の子は、此所を其身の家、我輩を其身の一軒置いて隣に住む者となし、長くかうして住むべきものやうに思つて居るのであらう。

翌る十六日は豫定の通り、六時に馬車で出立し、黒磯で九時三十一分の汽車に乗り、滞り無く東京へ歸つた。

那須温泉 下駄日記 畢

明治四十一年十二月五日印刷
明治四十一年十二月十日發行

豆相草鞋日記

定價金五十錢

著者

伊藤 藤 銀 月

發行者

前川 又三郎

發行者

杉本 要

印刷者

守岡 功

印刷所

株式會社 國光社

東京市京橋區中橋廣小路六番地
東京市京橋區五郎兵衛町廿三番地
東京市京橋區築地二丁目廿一番地
東京市京橋區築地二丁目廿一番地



發兌元

東京市京橋區中橋廣小路六番地
梁江堂

電話本局五七七番

次三十五
記日鞋草
著者及種百福平
錢十五金價定
錢六金稅郵

嘗て京都より東海道の無錢旅行を遂げて東海道研究の風を起すの緒を披きたる著者は更に東京より京都迄の流車に依らざる旅行を試み、一篇の草鞋日記を成し、箱根の降路は雲助の魂骨なる丁髷親仁に乗りたる馬を行かしめ、「箱根八里は馬でも越すが」を叫ばしめ、金谷の宿の醜夜は舊幕時代の川越人足を招きて大井川の古を語らしめ、關の宿屋にては「坂は照る／＼」の歴史の俗語を聞く所、五十三次の古跡名勝を盡く踏破す、景と俗と人と我と皆活きて躍り、今代を經とじ、前代を釋とし、續り成す錦織に天下稀有の珍書なり

著君月銀藤伊

豆草 相鞋 名日 勝記
附那福平 須百福平 温下泉 泉下泉 記日下泉 記日下泉
錢十五金價定 錢六金稅郵

五十三次草鞋日記一たび出で、日本に始めて眞の紀行文あり、土地に依て異なる天然の風景と人間の生活との特色を活現せしむるの手腕は斷じて何人も著者に企及すべからず、而して前書既に數版を重ねて未だ止まる所を知らざるに新に此第二の草鞋日記の出づるを見る前書は旅中に於ける自己を本位となし、が、此書は自己と土地との二元を立て、嶄新劃切なる案内記を兼ねしむべく作り成したり、何人も一本を座右に備へて、家居の娯樂と旅行の指針との兩用に供せざるべからず

中道陽山
記日鞋草
刊近

これ草鞋日記の第三として出づべくして京都に始まり馬關に終り五十三次草鞋日記に接続したるものなり、京都以西の地名勝に富む著者が此の旅行に興味を感ずること五十三次のそれに倍せり、これより試みんとするに臨み、五十三次の旅行より更に波瀾多からんことを期し、亦必ず波瀾多からしめんことを期す、蓋し旅行記の致を極めたるものは是れならん其の出づるや違からず乞ふ讀者測目して俟て

碧武大 瑠内倉 瑠桂耕 瑠舟耕 園君雨 著書
菊定價郵 菊定價郵 菊定價郵 菊定價郵
裝美裝洋判菊 裝美裝洋判菊 裝美裝洋判菊 裝美裝洋判菊
錢五十七金稅 錢五十七金稅 錢五十七金稅 錢五十七金稅

現時文壇の覇將として盛名一世を壓する某大家碧瑠園の名に隠れて一度小説人物政岡を東京日々新聞紙上に掲ぐるや、翕然たる好評は噴々として起り、今や文壇の注目は此の一篇に聚まれ、弊堂茲に先生に乞ふて、新の上梓は此の一篇を讀む者諸君に問はんとす、筆路の雄健に文章の流暢然も變轉幾百回の事實は抑揚自在の筆に依りて幾層の興味を添ゆ、東奥六十四郡を震動し、延ひて柳營老臣をも讚嘆せしめたる伊達騷動に於ける忠義の政岡が實歴は上篇に其端緒を開き、下編を以て遺憾なく叙述せらるる本書則ち當代の所謂武士道鼓吹の面目に叶ふものならんか

古鏞名 愚木取 茶清春 主方川 著人主 著君雨
菊定價郵 菊定價郵 菊定價郵 菊定價郵
裝美裝洋判菊 裝美裝洋判菊 裝美裝洋判菊 裝美裝洋判菊
錢二十金稅 錢二十金稅 錢二十金稅 錢二十金稅

明治文章史に特筆大書すべき耆宿某老大家が渾身の想を振ふて筆に現はされたるものをゆるさぬ、關一卷となす想を變幻極りなき幕末の旗本家庭と町家とに採り、篇中に三人の竊姚たる美人を現はし、幾層の波瀾を捲き起さしめ、或は敵となり、或は味方となりて活躍す、一方小説として見るべく、又一方幕末風俗史として各章の末尾に挿入せる當時の記録書、拔萃は史家が多大の好参考書たるべきを信ずるものなり

小 說 書 類

同	木下尚江	同	同	同	福地櫻痴	福地櫻痴	塚原遊柿	尾崎紅葉	古愚菴主人	碧瑠璃園
同	靈	啞	水野閣老	御落胤	葵の御紋	戀の山	關	乳人政岡	ゆるさぬ	新刊
全三册	全二册	近刊	近刊	近刊	近刊	印刷中	新刊	新刊	新刊	新刊
郵稅各六十五錢	郵稅各六十五錢	刊	刊	刊	刊	中	郵稅八錢	郵稅十二錢	郵稅十二錢	郵稅七十五錢

目 要 書 圖 兌 發 堂 江 梁

小 說 書 類

同	同	大倉桃郎	同	同	同	菊池幽芳	小笠原白也	石川半山	須藤南翠	德田秋聲
同	火	琵琶	舊山河	不知火	妙	嫁	世界的	大競走	間	奈
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册
郵稅八錢	郵稅六十五錢	郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅八錢

目 要 書 圖 兌 發 堂 江 梁

宗 教 哲 學 書 類

海老名彈正	浩々洞同人	清澤滿之	同	同	中村春雨	同	網島梁川	三並良	内田魯庵
靈海新潮	沈思錄	懺悔錄	解畫基督物語	舊約物語	新約物語	回光錄	病間錄	佛陀傳	イワンの馬鹿
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	近刊	全一册
郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅十二錢	郵稅十二錢	郵稅八錢	郵稅十二錢	郵稅八錢	郵稅十二錢	郵稅四錢

梁江堂發兌圖書要目

小 說 書 類

朝倉無聲	巖谷小波	柳川春葉	水谷不倒	小山内八千代	同	中村春雨	同	同	佐野天聲
日本小説年表	喜劇七草	縁の糸	岩窟穿	新緑	密航婦	無花果	大農外二篇	不死之誓	露の曲
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册
郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅八錢	各郵稅六錢	郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅八錢	郵稅六錢	郵稅八錢

梁江堂發兌圖書要目

宗 教 哲 學 書 類

高木壬太郎	基督教安心論	全一册	郵稅十二錢
建部遜吾	靜觀餘錄	全一册	郵稅十二錢
山路愛山	社會主義管見	全一册	郵稅六錢
塚 枯 川	婦人問題	全一册	郵稅四錢
五十嵐 力	兒童之研究	全一册	郵稅八錢
安部磯雄	理想之人	全一册	郵稅八錢
木下尚江	懺悔	全一册	郵稅六錢
梁 江 堂	病間錄批評集	全一册	郵稅六錢
綱島 梁 川	見神論評	全一册	郵稅八錢
字佐美 英太郎			

梁 江 堂 發 兌 圖 書 要 目

宗 教 哲 學 書 類

吉永智海	支那佛教史	全一册	郵稅八錢
蟠川龍夫	言哲學	全一册	郵稅八錢
小野藤太	起信哲學	全一册	郵稅八錢
同	佛教年代考	全一册	郵稅八錢
舟橋水哉	俱舍哲學	全一册	郵稅八錢
伊藤銀月	男女觀	全一册	郵稅四錢
現代名士	戀愛觀	全一册	郵稅四錢
伊藤銀月	現代青年論	全一册	郵稅四錢
山路愛山	支那思想史	全一册	郵稅六錢

梁 江 堂 發 兌 圖 書 要 目

文藝美術書類

同	同	薄田泣菫	小林萬吾	中澤弘光	澁川玄耳	伊藤銀月	浩々歌客	上田敏	瀧精一
行	白	白	風景水彩畫帖	富士十二景	東京見物	草鞋日記	鷗心錄	文藝講話	藝術雜誌
く	玉	羊	宮	景	物	記	錄	話	話
春	姬	宮	帖	景	物	記	錄	話	話
全一册	全一册	全一册	全六枚	全六枚	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册
郵稅四	郵稅八	郵稅八	郵稅五	郵稅十二	郵稅五	郵稅六	郵稅六	郵稅十二	郵稅八
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

梁江堂發兌圖書要目

文藝美術書類

河井醉茗	岩野泡鳴	與謝野晶子	同	同	高濱虛子	河東碧梧桐	燕村真筆	子規真筆
塔	泡鳴詩集	夢の華	黑髮	戀衣	俳諧一口噺	俳句評釋	俳諧三十六歌仙	俳人芭蕉
影	集	華	髮	衣	噺	釋	仙	蕉
全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全一册	全二册	全一册	全一册
郵稅六	郵稅八	郵稅六	郵稅五	郵稅四	郵稅五	各金二十五	郵稅八	郵稅八
錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢	錢

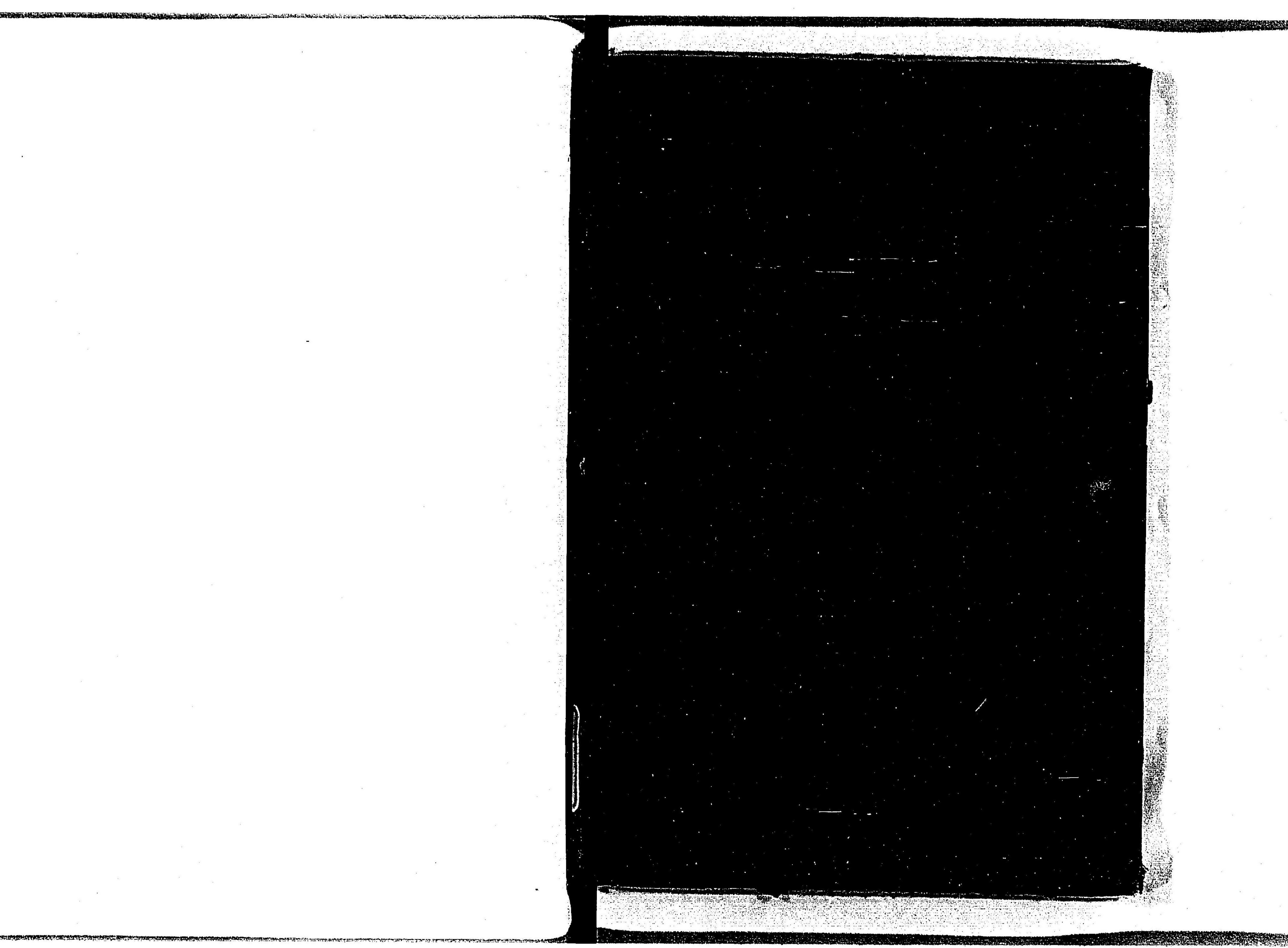
梁江堂發兌圖書要目

文 藝 美 術 書 類

與謝野鐵幹 子毒	薄田泣菫 暮	同 小	與謝野品子 亂	野口米次郎 オキソミラ 劍と戀の日本	横瀬夜雨 二 十八 宿	與謝野鐵幹 むらさき	一色醒川 頌	高安月郊 寐
草	集	扇	髮	本	宿	さ	榮	草
全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊	全一冊
郵金五 十六 錢	郵金六 十四 錢	郵金三 十五 錢	郵金三 十五 錢	郵金四 十六 錢	郵金五 十六 錢	郵金三 十五 錢	郵金四 十五 錢	郵金六 十八 錢

梁江堂發兌圖書要目

31
350



31
3.50

